

新潟県高田市立大町中学校社会科研究部編

『郷土史を加味せる新しい中学の日本歴史』（1950・1951年）について

茨木 智志

はじめに

本稿の目的は、1950年と1951年に発行された新潟県高田市立大町中学校社会科研究部編『郷土史を加味せる新しい中学の日本歴史』（以下、本書もしくは本書1950年版・本書1951年版とする）について、その特徴を当時の状況を踏まえて明示することにある。

本書は、1950年という時点において中学校の社会科教師たちがその中学校の生徒たちのために作成した日本史教科書（準教科書）である。このような書籍は全国的に見ても珍しい。1947年に発足した中学校は、旧制の国民学校高等科や中等学校とは異なって、すべての生徒が学ぶ義務教育の学校であった。中学校での最初の社会科は1～3年の「社会」と2・3年の「日本史」（当初は国史）で構成されていた。その中学校社会科の中の「日本史（国史）」（本稿では「社会科日本史」とする）はどのようなものであったのかが本稿の問題意識の根底にある。中学校社会科での歴史教育は、その後は「歴史的分野」となって今日に至っているが、その前の段階に当たる。

「社会科日本史」で始まった中学校社会科の歴史教育がその後の「歴史的分野」での歴史教育にどのようにつながっているのか、など解明すべき点が多い。しかし、「社会科日本史」は記録の乏しさもあり、おおむね同時期に展開した初期社会科ほどに研究が進められていないのが現状である¹。

本稿で取り上げる本書は、戦後教育改革期における中学校社会科教師による歴史教育の試みの一例であり、さらに新潟県高田市（現・新潟県上越市）という地域にお

¹ 「社会科日本史」に関する研究については、加藤章「『社会科』の成立と『国史』の存続」（『長崎大学教育学部教育科学研究報告』第25号、1978年）による問題提起から始まり、片上宗二『日本社会科成立史研究』（風間書房、1993年）によりその制度面を中心に成立が明らかにされてきた。その教科書については、梅野正信『社会科歴史教科書成立史 一占領期を中心に一』（日本図書センター、2004年）、具体的なカリキュラムや授業については、大木匡尚「東京都南多摩郡七生村立七生中学校における1951年度の社会科日本史カリキュラム検討」（『歴史教育史研究』第12号、2014年）、同「1950年代前半期における中学校『社会科日本史』の学習指導論と授業構想—フェニックス書院版教科書『育ちゆく日本』指導書（1952年）を事例として—」（『総合歴史教育』第50号、2016年）などが取り組まれてきた。

ける教育活動の一例でもある。本稿がこれらの研究の一助となれればと望んでいる。なお、引用に際して縦書きは横書きとし、旧漢字は基本的に新字体に直した。

1. 中学校「社会科日本史」について

1-1. 敗戦から社会科直前までの国史（日本史）

まず、本書の背景として敗戦から中学校「社会科日本史」までの経緯を確認する。

戦時下において国史教育は、国民学校令・中等学校令により国民科国史・国民科歴史とされていた。教科書についても新たに編集された国民学校用の『初等科国史』（上・下）『高等科国史』（上・下）、さらには中等学校用の初の国定歴史教科書である『中等歴史』（一・二・三）（など）が発行された。一般的に戦前における歴史教育の戦時化の極致と見なされている。

1945年8月15日の敗戦により国史を含めた教育の戦時から平時への転換が進められた。特に教科書の墨塗りがよく知られている。国史の場合は、同年12月31日の「修身、日本歴史及び地理停止ニ関スル件」の指令により、新しい国史教科書発行まで授業が停止されたように、特に厳しい措置が取られた。国史の暫定教科書の作成が文部省で進められたが、『暫定初等科国史』原稿への占領軍による拒否を経て、文部省外の著者に入れ替えての以下の国史教科書が作成された²。

国民学校用『くにのあゆみ』上・下、1946年9月翻刻発行

中学校用『日本の歴史』上・下、1946年10月発行・翻刻発行

（師範学校用『日本歴史』上・下、1947年1月・2月翻刻発行）

1946年10月に文部省から、新教科書の到着次第に国史授業を再開することが指示されている³。11月には「国史授業指導要項」が出されて、「新国史教育の方針」、「新教科書編纂の趣旨」、「教材の取扱上特に留意すべき点」などが提示されている⁴。この「国史授業指導要項」は旧学制下の学校を対象としたものであったが、大町中学校が本書1950年版を編集・発行する時点において、社会科の学習指導要領や通達をも含めて文部省から出された国史（日本史）授業に関わる文部省からの唯一の指示となるものであった。

以上のように敗戦以後において旧学校制度のもとでの国史授業が、一時の停止期間を経て、新教科書により再開されていた。

² その経緯については、片上宗二・前掲『日本社会科成立史研究』、久保義三『占領と神話教育—占領軍による記・紀神話の排除過程—』（青木書店、1988年）などが詳しく検討している。

³ 「国史の授業再開に付て」、発教第118号、1946年10月19日（『文部時報』第835号、文部省、1946年12月、32頁）。

⁴ 「国史授業指導要項について」、発教第118号、1946年11月9日（『文部時報』第836号、文部省、1947年1月、29～32頁）。なお、注3・注4の記号・番号は原文のまま。

1-2. 新学制下の中学校と新教科課程の「社会科日本史」

1946 年になって文部省と占領軍の協議により新たな学校制度である 6・3・3・4 制が決定し、新制の中学校が 1947 年 4 月に発足した。これは懸案であった前期中等教育の義務教育化の実現でもあった。これと並行して、新たな教科課程の検討が進められ、この中で社会科の導入が決定する。社会科は、旧来の修身・公民科・地理・歴史などを統合した総合的な内容のものと想定された。ただし、文部省上層部による反対、すなわち日本史（国史）通史を義務教育に残すことの要求が出されたため、一種の妥協により以下の表のように中学校社会科の 2・3 年に国史を“存置”することとなった⁵。

表 1：中学校社会科の構成と学年配當時数（1947 年 3 月）

教 科		7 学年	8 学年	9 学年
必修科目	社 会	175 (5)	140 (4)	140 (4)
	国 史		35 (1)	70 (2)

注：文部省『学習指導要領一般編（試案）—昭和二十二年度—』（1947 年 3 月）から一部を抜粋した。数字は授業時数であり、括弧内は週当たり時数である。

このように中学校社会科は「社会」と「国史」が別枠で設置されるという変則的な形で始まりとなった。1947 年 4 月の小学校・中学校発足時に、社会科は準備の遅れを理由に授業開始を 9 月からとしたが、中学 2・3 年の国史については『日本の歴史』で「学習を実施することは差支えない」とされた⁶。そのため中学校では「社会」と「国史」は開始も異なることとなった。また、最初の 1947 年版学習指導要領では中学校社会科の「国史」について全く記載がなかった⁷。そのため中学校の「社会科日本史」は学習指導要領がないままで、教師に任せられる形で授業が開始された。本書も学習指導要領のない中での編集となる。

実施 3 年目に入った 1949 年 5 月の通達で「国史」を「日本史」と改称し、授業時数に幅を持たせた形で「社会科と日本史、…各々の時間をあわせて運営してもよい」とした⁸。ここで教科課程上では 1927 年以来「国史」とされてきた名称が「日本史」

⁵ 加藤章・前掲「「社会科」の成立と「国史」の存続」、片上宗二・前掲『日本社会科成立史研究』などが詳しい。

⁶ 「社会科実施について」、発学第 185 号、1947 年 4 月 22 日（文部省大臣官房総務課『終戦教育事務処理提要 第四集』1950 年 3 月、156 頁〔文部省編『文部行政資料（終戦教育事務処理提要）第 4 集』国書刊行会、1997 年〕）。

⁷ 中学 1 年～高校 1 年の社会科について書かれた『学習指導要領社会科編（Ⅱ）（第七学年—第十学年）（試案）—昭和二十二年度—』（文部省、1947 年 6 月）は、中学校 1 年～高校 1 年までの総合的な内容の社会科学学習のみを対象としていた。

⁸ 「「新制中学校の教科と時間数」の改正について」、発学第 261 号、1949 年 5 月 28 日（近代日本教

と改められた。

表 2：中学校社会科の構成と学年配当時数（1949 年 5 月）

教 科		1	2	3
必修科目	社 会	140-210	105-175	140-210
	日本史		35-105	35-105

注：「新制中学校の教科と時間数」の改正について」（発学第 261 号、1949 年 5 月 28 日）から一部を抜粋した。数字は授業時数である。

本書 1950 年版はこの枠の中での「社会科日本史」用の教科書（準教科書）となる。実施 4 年目が終わる 1951 年 3 月に「中学校および高等学校、社会科日本史の指導計画について」の通達が出された⁹。ちなみに文部省での学習指導要領の改訂作業は 1949 年から始められており、この通達はその中間発表に位置づけられている。

実施 5 年目に入った 1951 年 4 月には「中学校教育課程時間配当表の一部改正」により、表 3 のように「日本史」の時間を「社会」に組み入れて提示した。これは「独立教科のような誤解を与えがち」であったためと説明しており、「日本史」はどの学年で授けても、また、時間を特設しなくてもよいとした。1951 年 6 月の本書 1951 年版はこの時期に発行されている。

表 3：中学校社会科の構成と学年配当時数（1951 年 4 月）

教 科		1	2	3
必修科目	社 会	140-210	140-210	175-315

注：「中学校教育課程時間配当表の一部改正」（文初中第 381 号、1951 年 4 月 17 日）から一部を抜粋した。数字は授業時数である。

なお、「社会科日本史」については 1951 年版学習指導要領で初めて取り上げられた。1951 年 12 月の『中学校・高等学校学習指導要領 社会科編Ⅰ 中等社会科とその指導法 試案—昭和 26 年（1951）改訂版—』では「中学校日本史の特殊目標」8 項目を示し¹⁰、1952 年 10 月の『中学校・高等学校学習指導要領 社会科編Ⅱ 一般社会科（中学校 1 年～高等学校 1 年、中学校日本史を含む）（試案）—昭和 26 年（1951）改

育制度史料編纂会編『近代日本教育制度史料』第 23 巻、講談社、1957 年、275～280 頁）。

⁹ 「中学校および高等学校、社会科日本史の指導計画について」、文初中第 321 号、1951 年 3 月 27 日。

¹⁰ 文部省『中学校・高等学校学習指導要領 社会科編Ⅰ 中等社会科とその指導法 試案—昭和 26 年（1951）改訂版—』、1951 年 12 月 5 日。

訂版一』で詳細に解説された¹¹。実施6年目ということになる。

その後、中学校社会科は1955年版と1958年版の学習指導要領改訂の中で3分野による内容に移行していき、「社会科日本史」は「歴史的分野」に“解消”していくこととなる¹²。ただし、後述するように「日本史」教科書は1956年度用まで発行されている。

このように、中学校「社会科日本史」は1947年度から実施されていたにもかかわらず、学習指導要領は1951年3月の中間発表を経て、実施6年目の1952年10月により早く発行された。本書は学習指導要領発行の前の1950年6月に発行され、1951年6月に改訂版が発行されたものであった。

1－3. 中学校「社会科日本史」用の教科書

中学校「社会科日本史」に関わる規定や文部省からの指示は上述のような状況であった。その間の「社会科日本史」の教科書について確認する。正式に検定済教科書の使用が開始された1952年度を境に2つの時期に分けられる。

まず、1947年度～1951年度の中学校「社会科日本史」教科書について述べる。

1947年4月の新制中学校発足とともに「社会科日本史」の授業が始まるが、新制中学校用の教科書はなかったため、旧制の教科書の使用が指示された。

1947年度用教科書目録（1947年4月）では、2学年で「日本の歴史上」、3学年で「日本の歴史下」が「備考」に「二十一年度中教翻刻発行ト同ジ」と添えて掲載されている¹³。すぐに6月には、中学2・3年生の国史教科書として『くにのあゆみ』を「使用して差支えない」と通達された¹⁴。ただし用紙不足により増刷はないとも書かれている。1948年度用教科書目録（1948年3月）では、2学年で「くにのあゆみ上」、3学年で「くにのあゆみ下」が掲載されている¹⁵。このように旧制の教科書である『くにのあゆみ』もしくは『日本の歴史』を使用しての新制中学校での「社会科日本史」授業が指示された。占領軍にとっても自己の管理下で編集された教科書の使用に異論はなかったものと考えられる。

ただし、新制中学校での「社会科日本史」の教科書がないことは教育行政上の責任問題であったため、文部省は新たな教科書の作成を進めていた。1948年7月頃に発行された1949年度用教科書目録では2・3学年用として教科書番号「中社806」、教科

¹¹ 文部省『中学校・高等学校学習指導要領 社会科編Ⅱ 一般社会科（中学校1年～高等学校1年、中学校日本史を含む）（試案）—昭和26年（1951）改訂版—』1952年10月20日。

¹² 文部省『中学校学習指導要領社会科編—昭和30年度改訂版—』（1956年2月20日）および「中学校学習指導要領」（文部省告示第81号、1958年10月1日、同日『官報』号外第76号）。

¹³ 文部省『昭和二十二年度使用中等学校教科用図書目録』、1947年4月。引用文中の「中教」とは中等学校教科書株式会社のことである。

¹⁴ 「新制中学校の国史教科書について」、発教第71号、1947年6月16日（近代日本教育制度史料編纂会編『近代日本教育制度史料』第25巻、講談社、1958年、330頁）。

¹⁵ 文部省『昭和二十三年度使用中学校教科用図書目録』、1948年3月。

書名「日本歴史」、著作者名「文部省」で備考に記号で「新編さん、昭和 23 年度〔1948年度：引用者注〕中に発行予定であるが未許可のものである」と記された教科書が掲載されている¹⁶。しかし、予定通りに 1948 年度に発行されることはなかった。そのため、1949 年 7 月になって文部省は「発行に至るまでにはなお相当の時日を要する見込」なので、中学 2・3 年生用の『くにのあゆみ』を「参考教材」として「重版供給」すること、購入希望は 8 月 20 日までに冊数を申し込みのことと連絡している¹⁷。なお、この文部省著作の教科書はほぼ完成したらしいが、結局のところ発行はされなかった¹⁸。

1949 年度から検定教科書の使用も始まるが、しかし社会科の検定教科書の場合は遅れて翌年度から、中学校の「日本史」と高校の「日本史」「世界史」つまり歴史に関わる新たな検定教科書発行はさらに大いに遅れて、結果的に 1952 年度からの使用となった¹⁹。そのため、多くの中学校では「補助教材」「副教材」などの名目で『くにのあゆみ』が使われた。1949 年・1950 年には上下巻を 1 冊にしたものが「文部省著作教科書」の「中学校第二・三学年用」として発行されている²⁰。その一方で、正式な意味での教科用図書ではないながらも授業や生徒用に作成された書籍が発行された。これらを準教科書と呼んでいる²¹。中学校「社会科日本史」でもその存在が認められる。後の検定教科書につながる大小の出版社によるものが多い中で、地域的な「社会科日本史」の準教科書の存在がいくつか確認できる²²。本書もその一つに位置づけられる。

次に、本書 1950 年版・本書 1951 年版以後のことになるが、1952 年度からの中学校

¹⁶ 文部省『昭和二十四年度使用中学校教科書目録その一』。年欠であるが「昭和 23 年 7 月 22 日現在によつたもの」との記載がある。

¹⁷ 「昭和二十四年度用中学校及び高等学校の日本史教科書について」、発調第 60 号、1949 年 7 月（文部省大臣官房総務課『終戦教育事務処理提要 第五集』1951 年 3 月、386 頁〔文部省編『文部行政資料（終戦教育事務処理提要）第 5 集』国書刊行会、1997 年〕）。

¹⁸ 梅野正信・前掲『社会科歴史教科書成立史 ―占領期を中心に―』が詳しい。

¹⁹ その間の経緯については、茨木智志「CIE 史料に残された「世界史」教科書の英語原稿について―1950 年実施の「世界史」教科書検定の経緯に対する検討―」（『歴史教育史研究』第 11 号、2013 年）が検討を加えている。

²⁰ 文部省『くにのあゆみ』（中学校第二・三学年用）日本書籍、1949 年 11 月翻刻発行。また、1950 年 2 月修正のものも発行された。『くにのあゆみ』は 1952 年度用の中学校教科書目録まで「補助教材」として記載されている。

²¹ 準教科書の中でも高校社会科「世界史」準教科書については、吉田寅「「世界史」成立前後の教科書・準教科書について」（『立正大学人文科学研究年報』第 28 号、1991 年）が準教科書と位置づけて初めて正面から取り上げて、その意義と概要を提示し、茨木智志「初期世界史教科書考―「世界史」実施前後から検定教科書使用までの各種出版物に焦点を当てて―」（『歴史教育史研究』第 6 号、2008 年）、同「準教科書に見る初期の世界史教育の模索」（『社会科教育論叢』第 47 号、2010 年）が検討を進めた。

²² 例えば、金沢市立中学校教育研究会歴史部編集発行『中学校の日本史』（1949 年 9 月 30 日発行・11 月 15 日修正発行、本文 103 頁）などがある。

「社会科日本史」用の検定教科書についても簡単に確認しておく。1952年度用の教科書目録には「日本史」用に8社9種13冊（『くにのあゆみ』を除く）が掲載されている²³。この中のいくつかは準教科書としても発行されていたものであった。以後は目録に、1953年度用10社12種15冊、1954年度用16社18種21冊が挙げられ、1955年度用からは「従来の日本史」として12社14種17冊、1956年度用は6社8種10冊が挙げられている²⁴。全体で16社24種29冊の中学校「社会科日本史」の検定教科書が発行されることになる。これらは改訂版を除くと18種となる。すべての教科書が1952～1954年度用の時期に新規に発行されている。繰り返しになるが、本書1950年版・本書1951年版はそれ以前のものとなる。

2. 高田市立大町中学校での「社会科日本史」

2-1. 高田市立大町中学校

高田市立大町中学校（以後、大町中学校）は新潟県高田市大町3丁目（現在の上越市大町3丁目）に所在していた。1959年に城北小学校との校舎交換および春日中学校との統合がなされて移転し、現在は上越市立城北中学校（上越市栄町4丁目）となっている²⁵。高田城の旧城下町であった高田市の中心地に位置する中学校であった。

高田市は1947年5月に大町国民学校（高等科の単独校であった。青年学校も併設）を新制中学校として市内の中学1年生を全員入学させ、前年度の高等科1・2年生を中学2・3年生とした。1946年に大町国民学校長として着任していた阿部^{たけひこ}猛比子が、引き続き大町中学校長となった。阿部は新潟県の戦後の新教育を強力に牽引していく存在であった²⁶。

大町中学校では阿部のもとで新教育への対応を継続しており、1949年7月11・12日には新潟県の指定校として取り組んだ「計画性を重視せる学習指導」の研究会を開催した。このときに『大町プラン実践報告 No.1 計画性ヲ重視セル学習指導²⁷』（以

²³ 文部省『昭和27年度使用教科書目録 中学校用』、1951年5月。

²⁴ 以下を参照した。文部省『昭和28年度使用教科書目録 中学校用』、1952年5月。同『昭和29年度使用教科書目録 中学校用』、1953年5月。同『昭和30年度使用教科書目録 中学校用』、1954年5月。同『昭和31年度使用教科書目録 中学校用』、1955年4月。

²⁵ 大町中学校のあった場所は、現在は上越市立大町小学校となっている。

²⁶ 以下の大町中学校についての記載は、主に次の文献を参照した。高田市史編集委員会『高田市史』第1巻～第3巻、高田市役所、1958年・1980年。大町中学校元教員有志『回想の原風景 大町中学校』（1992年、長谷川新氏所蔵）。上越市史編さん委員会『上越市史 通史編6現代』上越市、2002年。

²⁷ 『大町プラン実践報告 No.1 計画性ヲ重視セル学習指導』高田市立大町中学校、中村憲三・長谷川新編集、阿部猛比子発行、1949年7月。2年後の1951年10月の研究会に際しては『“計画性を重視する”学習指導の実践と展望—研究紀要第2集—』（高田市立大町中学校、清水八郎・長谷川新編集、阿部猛比子発行）が発行されている。この第2集では「社会科」の中に「日本史単元」が別に配当されている。

後、大町プラン報告書とする)が発行されている。ここに 1949 年度の「社会科日本史」の構想と報告が提示されている。「日本史指導の目標」を定めて、8 つの単元からなる通史としての日本史を設定し、「計画学習」の実践の報告がなされている²⁸。

2-2. 大町中学校での「社会科日本史」

大町中学校での「社会科日本史」の取り組みと本書作成に至る経緯などを確認しておく。

1949 年 7 月発行の『大町プラン報告書』の「社会科日本史」では、文部省から「社会科日本史」として発刊された「コース、オブ、スターデイ」も「生徒の教科書試案と見るべきもの」もない状況にあり、「社会科日本史」について「この科を担当しているものは全く混迷の現状であると申しても過言ではあるまい」と当時の状況について述べている²⁹。そこで、生徒が学習するための教科書・参考書がないため、「各単元毎のテキストを作製して生徒の学習にあてゝいる」として、「昨年一ヶ年〔1948 年：引用者注〕はこれを我々の手によつてプリントして用いていたが今年〔1949 年：引用者注〕は…印刷して生徒に配布している」と説明している。この「テキスト」について特に努力したのは「参考事項」であるとしている。これは「生徒の学習活動を容易にする為に多く入れること」を心がけたものであり、生徒が困却する「参考書不足」を緩和して「生徒の学習に無言の裡に助言しよう」と意図した」ものとしている³⁰。この「参考事項」の考え方は本書の内容に引き継がれている。

この単元別のテキストについては、本書の「はじめに」でも次のように触れられている。

中学校の生徒用として適当な日本史の学習書がなく、苦しい学習をつづけてきた私達は日本の歴史を通史として学習する重要性を考えれば考えるほど、じっとしてられません。そこで昭和二十四年度〔1949 年度：引用者注〕には、単元別のものをつくりましたが、今度それを反省したり検討したりしてここに「新しい中学の日本歴史」を編集しました。(本書 1950 年版、「はじめに」。下線は引用者によるものである。以下、同じ)

なお、本書 1951 年版の「はじめに」では「昭和二十三年〔1948 年：引用者注〕初春には、単元別のものをつくりましたが、」(3 頁)と直されているので、『大町プラン報告書』の記載のように 1948 年度と 1949 年度には単元別のテキストを作成して、

²⁸ 『大町プラン報告書』の「社会科日本史」の詳細については、別稿を予定している。

²⁹ 前掲『大町プラン報告書』、「社会科日本史」、本文 1 頁。この報告書は教科目ごとにページ番号が付されており、しかも「社会科日本史」は本文と資料とでページ番号が別になっている(上越市立城北中学校所蔵本)。

³⁰ 前掲『大町プラン報告書』、「社会科日本史」、本文 4～5 頁。

教師による「プリント」および「印刷」（業者によるものか）によって配布して使用したものと推測される³¹。なお、『大町プラン報告書』では「終戦後僅かに一回発刊した「日本の歴史」を骨子として³²」単元別のテキストを作成したとも書かれているので、1946年発行の旧制中学校用の『日本の歴史』上・下が参照にされたい。この「社会科日本史」の単元別のテキストについては現物の確認ができておらず、今後の課題としたい。

3. 『郷土史を加味せる新しい中学の日本歴史』の概要と編集

3-1. 本書の概要

本書 1950 年版と本書 1951 年版の書誌に関わる情報は、以下のとおりである。

表 4：本書 1950 年版の概要

『郷土史を加味せる新しい中学の日本歴史』（1950 年 6 月発行）	
形態：B5 判。表紙以外はモノクロ印刷。縦書き。基本的に旧漢字に新仮名遣いを使用。	
内容：表紙、扉、「はじめに」（1 頁分）、「目次」（2 頁分）、本文（1～167 頁〔167 頁目は番号の記載なし〕）、「をわりに」・奥付（1 頁分）。扉から奥付まで 172 頁。	
表紙は緑色を基調として右縦に黄色の線、「郷土史を加味せる／新しい中学の日本歴史」と書名のみ白色で記載。扉には書名に加えて編集と執筆者名を記載。裏表紙はない（欠損か否かは不明）。	
編集・執筆：（扉での記載は次の通り）	
新潟県高田市立大町中学校／社会科研究部編集	
高田市立大町中学校教諭 高橋修治／全 中村憲三／全 茂利了／全 清水八郎／全（現高田農業高等学校教諭）大坪秀雄	
奥付：昭和二十五年六月十五日印刷／昭和二十五年六月二十日発行 【代謄写】	
編集者 大町中学校社会科研究部	
印刷所 三共印刷所	
印刷人 横尾正	
発行所 大町中学校	
所蔵：上越市立高田図書館（2 冊）：①（J／20／キ）扉に「昭和 62 年 1 月 15 日（自館受入）」の記載。奥付に「26. 5. 2」の印あり。②（J／20／キ）奥付に「26. 5. 2」の印あり。書籍にはないが、①・②ともに検索の「資料詳細」には「定価 150 円」と記載あり。	

注：本書 1950 年版により作成した。改行は「／」で表した。

³¹ 詳細は不明ながら、1948 年に大町中学校に国語科教員として着任した長谷川新氏が当時の卒業生に確認したところでは、「学ぶ内容が記載されている新聞紙大の広い紙を渡され、織り込んで使った」などの回想を得ている（茨木あての長谷川新氏書簡、2022 年 10 月 13 日）。

³² 前掲『大町プラン報告書』、「社会科日本史」、本文 4 頁。

表5：本書1951年版の概要

『郷土史を加味せる新しい中学の日本歴史』（1951年6月発行）	
形態：（本書1950年版に同じ）	
内容：表紙、扉・扉裏、「はじめに」（3～5頁）、「目次」（6～7頁）、本文（1～162頁）、「おわりに」・奥付（163頁）。扉から奥付まで170頁。	
表紙はすべて緑色で、「郷土史を加味せる／新しい中学の日本歴史」と中央縦に書名、右上に「新潟大学高田分校 小島眞先生監修」、左下に「新潟県高田市立大町中学校／社会科研究部編」とそれぞれ黒色活字で記載、左上と右下に挿絵。扉は白色で挿絵以外は表紙と同じ。扉裏に執筆者名を記載。	
編集・執筆：（扉での記載）	
新潟県高田市立大町中学校／社会科研究部編集	
（扉裏での記載）	
高田市立大町中学校教諭 高橋修治／全 清水八郎／全（現直江津高等学校教諭） 中村憲三／全（現東頸城郡安塚村立中川小学校校長） 茂利了／全（現高田農業高等学校教諭） 大坪秀雄	
奥付：昭和二十六年六月一日印刷／昭和二十六年六月五日発行 【代謄写】	
編集者 大町中学校社会科研究部	
印刷所 三共印刷株式会社	
印刷人 横尾正	
発行所 大町中学校	
所蔵：①宮城教育大学附属図書館（KA／T142）：所蔵等に関わる記載は特になし。②東京大学大学院教育学研究科・教育学部附属図書室（東大教育／仲文庫／6220）：仲新旧蔵本であることを示す「仲文庫」の印がある。緑の表紙がなく、扉から始まっている。	

注：本書1951年版により作成した。改行は「／」で表した。

本書の本文は縦書き46文字16行を基本としたものである。小さな活字で補足的に記述された部分も多い。また、写真や挿絵、図表も多く掲載されている。特徴的なのは本文上部の頭注に当たる箇所、注記もしくは重要な語句がほぼすべてのページに記載されている（稿末の資料参照）。

新潟県高田市立大町中学校社会科研究部として5名の高田市立大町中学校教諭（もしくは元教諭）の名前が記載されている。以下の通りである（本書1950年版での掲載順）。

表6：本書の執筆者一覧

名前	着任年月	出身校・卒業年月	年齢
高橋修治	1946年9月	高田師範学校・1929年3月	40
中村憲三	1946年10月	高田師範学校・1939年3月	31
茂利 了	1946年3月	高田師範学校・1928年3月	41

清水八郎	1950 年 3 月	高田師範学校・1938 年 3 月	33
大坪秀雄	1947 年 12 月	高田農学校	32

注：着任年月は「在職・教職員名簿」（大町中学校元教員有志『回想の原風景 大町中学校』1992 年）による。ただし、中村については中村憲三『おまん先生放浪記』（週刊文化新聞社、1976 年、353 頁）による。出身校・卒業年月は『昭和二十四年六月 会員名簿』（新潟第二師範学校同窓会編集発行、1949 年）による。ただし、大坪については長谷川新氏の教示による。年齢は執筆時（1949 年）の年齢として『新潟県教職員名簿 昭和 23 年版』（新潟県教職員組合、1948 年、36～37・314 頁）記載の年齢に単純に 1 を加えた数字である。

社会科研究部の 5 名の執筆者は執筆時（1949 年。後述）に 31～41 歳で、高田師範学校（大坪を除く）を卒業して戦前から教職に従事し、その後に新制の中学校に着任して新たに社会科教育・日本史教育に携わった教師たちとなる。つまり戦前の国史の教育を受け、戦前に国史の教育を行なってきた世代の教師たちが、新たな制度の学校である中学校での新たな「社会科日本史」を検討したものと位置づけることができる。

長谷川新氏によれば清水は数学を担当していたという。1950 年 3 月着任でしかも数学担当の清水が本書の執筆者に入っているのは奇異な感じがするが、図書係の担当であったからではないかと長谷川新氏は推測している。清水は大町中学校の前後は小学校に勤務しており、その後も社会科の著作に関わっている人物である³³。また、長谷川新氏によれば、高橋は教頭としての役割を果たしていた。高橋は『大町プラン報告書』では「社会科」に加えて「一般篇」の多くを執筆している。長谷川新氏によれば、社会科の中心になっていたのは中村であったという。中村は 1948 年に 4 名で上越社会科教育研究会（現在の新潟県社会科教育研究会）を発足させており³⁴、1949 年の『大町プラン報告書』では大坪とともに「社会科日本史」の執筆を担当していた。1951 年には西山芳夫との編集で『郷土「新潟県」に立脚した中学校社会科指導の手引き』を発行している³⁵。

3-2. 本書の編集

前述のように 1948 年度・1949 年度の「社会科日本史」は単元別のテキストを作

³³ 清水は、上越社会科教育研究会編『郷土「新潟県」に立脚した中学校社会科指導の手引き—指導計画と内容の解説—』（三共印刷、1951 年 10 月）に「協力」者として名前が挙げられている。さらに、1952 年 4 月に異動した新潟大学教育学部附属高田小学校（現在の上越教育大学附属小学校）で社会科についての論考を著している（清水八郎「社会科指導の改善」『教育創造』第 5 巻第 11・12 号、高田教育会、1952 年 12 月）。

³⁴ 西山芳夫「畏友 中村君」（中村憲三『おまん先生放浪記』週刊文化新聞社、1976 年）では、星野恭誌・牧田利平・中村・西山の 4 名で「昭和二十三年（1948 年：引用者注）の木枯の吹き荒ぶ晩秋の一日」に研究会が発足したと記している。

³⁵ 上越社会科教育研究会編・前掲『郷土「新潟県」に立脚した中学校社会科指導の手引き—指導計画と内容の解説—』。

成・配布して授業を進めていた。本書 1951 年版の「はじめに」では「…、昭和二十四年〔1949 年：引用者注〕の夏休みを利用して、単元別のものを反省したり検討したりして、ここに「新しい中学の日本歴史」を編集しました。」(3 頁。下線は引用者)と記しており、本書 1950 年版の編集の時期が 1949 年の夏休みであったことが分かる。前述の 1949 年 7 月の研究会終了後、間もなく編集されたことを意味している。

本書が何を参照して編集されたのかは大変に興味を引くところである。本書 1950 年版の「をわりに」には、「この本をつくりますときにはおよそ七十数冊の本を研究しました。それら先人の貴い研究を基としてできあがつたものです」と記している。この「およそ七十数冊の本」についての詳細は不明であるが、当時において可能な限り入手した書籍を「研究」して編集したものであろう。一方で、1948 年・1949 年の単元別のテキストは 1946 年の『日本の歴史』を「骨子」としたと書かれていたが、本書の構成や内容に関してはあまり類似を感じられない。「単元別のものを反省したり検討したり」した結果、全く新たに作成されたものと考えられる。

1949 年の夏休みから編集を始め、同年 10 月発行の郷土史の書籍の内容を取り入れ(後述)、1950 年度使用を目指して急いで編集されている³⁶。

4. 『郷土史を加味せる新しい中学の日本歴史』の特徴

4-1. 本書の内容構成

本書の特徴を、1950 年版を中心にして確認したい。本書 1950 年版は以下のような内容構成となっている。

表 7：本書 1950 年版の内容構成

はじめに、(1 頁分)
目次、(2 頁分)
第一単元 原始社会はどのようなものであつたか、1～19
一、人類の始まりと私たちの国土、1～3
二、私たちの祖先の生活、3～7
三、農耕の始まりと生活の進歩、7～12
四、中国の記録からみた日本のようす、12～16
五、其の頃の郷土のようす、16～18
研究問題、18
年表、18～19
第二単元 古代の社会はどのようにして統一され人々はどんな生活をしていたか、20～64
一、大和朝廷の統一、20～27

³⁶ 編集を急いだためか、本書は誤植が散見される(稿末の資料参照)。

二、大化の改新、28～33
三、律令国家の発展、33～37
四、天平の文化、37～42
五、人々の生活、42～46
六、律令国家のくずれ、46～48
七、平安の文化、48～54
八、荘園の発達、54～61
研究問題、61～62
年表、62～64

第三単元 封建社会はどのようにして成長し、どのようにして展開したか、
65～90

一、封建社会の成立、65～68
二、鎌倉の文化、69～73
三、封建社会の発展、73～76
四、封建社会の変動、76～82
五、東山文化、82～85
六、戦国時代、85～86
七、大陸とのつながり、86～88
研究問題、88～89
年表、89～90

第四単元 封建社会はどのようにして確立され、人々の生活はどのように営ま
れたか、 91～123

一、全国の統一、91～97
二、江戸幕府の成立、97～109
三、鎖国、109～110
四、封建社会の確立、110～111
五、元禄の文化、111～114
六、幕府政治の変遷、114～118
七、文化文政の文化、118～123
研究問題、123

第五単元 近代の社会はどのようにして成立したか、 124～142

一、封建制度の崩壊、124～130
二、近代えのあゆみ、130～134
三、明治維新、134～137
四、文明開化、137～140
研究問題、140
年表、141～142

第六単元 近代の社会はどのように進展したか、 143～166 (167) ³⁷

³⁷ 167 頁目には番号が付されていない。

- 一、自由民権運動、143～147
- 二、資本主義の発達と近代産業、147～151
- 三、近代文化、152～155
- 四、帝国主義のあらわれ、155～158
- 五、太平洋戦争、158～162
- 六、民主日本の建設、162～166
- 研究問題、166
- 年表、(167)
- をわりに・(奥付)、(1 頁分)

注：本書 1950 年版により作成した。番号はページを示す。内容の詳細は稿末の資料参照。

全体を 6 つの単元として構成し、単元ごとに「研究問題」があり、時代ごとに「年表」が掲載されている。

時代は、原始（1 単元）・古代（1 単元）・封建（2 単元）・近代（2 単元）としている。これは人類の発展段階を示した時代区分となる。この時代区分は中学校社会科でいうと 1952 年 10 月発行の「社会科日本史」の学習指導要領³⁸でのものであるが、それ以前に、前述の未完に終わった文部省での中学校日本史用教科書編纂時に採用された時代区分としても知られる³⁹。また、この当時発行された日本史や日本史教育にかかわる書籍でも多く見られる。本書が具体的に何を参照したのかは不明であるが、戦前の教科書および 1946 年の『くにのあゆみ』『日本の歴史』で見られる平安・鎌倉・室町などの政権の所在地での時代区分ではない点、さらに前述の 1946 年の「国史授業指導要項」での「古代・上代・中世・近世・現代」でもない点が注目される。

各時代については以下のような内容で構成されている。これは本書の日本歴史の全体的な捉えを示している。

- ・原始社会（全 19 頁）：第一単元
人類の始まりから
- ・古代社会（全 45 頁）：第二単元
「大和朝廷」の統一から（本書 1951 年版では「大和国家」）
- ・封建社会（全 59 頁）：第三単元・第四単元
成長・展開は、鎌倉幕府の成立から
変動は、建武の新政、室町幕府の成立、戦国時代
確立は、全国統一、江戸幕府の成立

³⁸ 文部省・前掲『中学校・高等学校学習指導要領社会科編Ⅱ一般社会科（中学 1 年―高等学校 1 年 中学校日本史を含む）（試案）』。

³⁹ 梅野正信「戦後の歴史教育と社会科教育―中等国史教科書編纂委員会の歴史的検討―」（『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』第 40 巻、1988 年）。なお、「近代」とするか「資本主義」とするかで議論があったことが指摘されている。

・近代社会（全 44 頁）：第五单元・第六单元

成立を、封建制度の崩壊から述べている。

進展を、自由民権運動から述べている。

20 世紀以降を「帝国主義のあらわれ」とし、満州事変を「侵略主義の開始」としている。

敗戦後を「民主日本の建設」と捉えている。

（本書 1951 年版では敗戦後を「第七单元 平和への出発」と分けている。）

第一単元の原始社会は「人類の始まり」から記述されている。当時において確認されていたジャワ、北京、ヨーロッパで発見された化石人類から日本史が始められている。その後の社会科歴史的分野の教科書では一般的な書き方となるが、当時の日本史記述では少数派であった。世界の中の日本史を意識していることが指摘できる。そして「日本列島のおいたち」に入っている。

古代社会、封建社会、近代社会では、政治史に加えて社会や文化、さらに生活について書かれている。生活については单元名にも表れている（第二单元・第四单元）。本書の書名にもある郷土についても随所に記述されている（後述）。

全体に封建社会の時代である鎌倉時代から江戸時代、特に全国統一・江戸幕府の時代（第四单元）に紙幅の多くが割かれている。上杉謙信の存在や江戸初期の高田城に起源をもつ高田市という地域性が指摘できる。

近代社会の成立（第五单元）は、「封建制度の崩壊」「近代えのあゆみ」を経ての「明治維新」「文明開化」という形で記述されている。1946 年の『くにのあゆみ』『日本の歴史』での「開国」を「幕府の衰亡」「封建制度の衰亡」の中に位置づけて、「明治維新」を別項にしている書き方とは異なる。また、近代社会の進展（第六单元）は自由民権運動から述べられて、帝国憲法下の帝国議会開設につながられている。

「見かけだけの議会」であったが「それでも政府の専制をおさえる道がわずかでもひらけたことは自由民権論者のたまものである」（本書 1950 年版、146 頁）と位置づけている。20 世紀以降の「帝国主義のあらわれ」「太平洋戦争」では「侵略主義」「軍国主義」を非常に厳しく批判的に記述している。1945 年の敗戦以後については「民主日本の建設」として約 5 年間の出来事を 4 ページほど費やして詳述し、最後は「湯川博士（ノーベル賞）」「新教育制度」について述べ、「平和への出発」として「我々はもう一度日本の歴史を調べてこの新しい時代に何を改め何をのぼしたらよいかについて考えてみよう」（本書 1950 年版、166 頁）という言葉で締めくくっている。

4-2. 本書における人物

記載された歴史上の人物から本書について分析する。歴史教科書での人物名の記載の有無が何を意味しているのかを、その時期による制度や学習方法などによって一概に評価することはできないのは当然であるが、歴史教科書としての特徴の一端を確認することはできると考える。

本書 1950 年版に記載された人物は以下のとおりである。ここでは「政治・社会」「文化」「郷土」「研究者」に分けて、単元ごとに示した。

表 8：本書 1950 年版に記載された人物一覧

凡例

- ・本書 1950 年版に記載された人名（伝承の人名を含む）を「政治・社会」「文化」「郷土」「研究者」「年表」に分けて、単元ごとに掲載した。各人物の位置づけは記述箇所の内容による。
- ・表記は原文のままを基本としたが、明確な誤植等は改めた。肩書等は基本的に省略した。
- ・注での記載には「注・」と書き入れた。〔 〕は表作成者によるものである。
- ・下線の点線（_ _ _ _）は時代や関連したものを示すための記述などで登場した人名である。
- ・重複する場合は初出あるいは中心的な記載箇所を基本とする。
- ・「文化」「郷土」の部分では、その他の部分と重複して記載された人名を括弧（ ）で示した。
- ・「年表」の部分は、本文等で記載されていない人物に限定した。

○政治・社会

・第一単元

前漢の武帝 光武帝 帥升 卑弥呼 難升米

・第二単元

好太王〔碑〕 推古天皇 聖徳太子 小野妹子 裴世清 高向玄理 僧旻 南淵請安 天智天皇（中大兄皇子） 中臣鎌足 蘇我入鹿 蝦夷 孝徳天皇 天武天皇 不比等 武智麻呂 房前 宇合 麻呂 光明皇后 橘諸兄 吉備真備 玄昉 道鏡 和氣清麻呂 光仁天皇 桓武天皇 嵯峨天皇 良房 清和天皇 基経 宇多天皇 菅原道真 道長 藤原元命 平将門 藤原純友 平忠常 源頼信 源義家 後三条天皇 白河天皇 堀川天皇 平清盛 源義朝 源頼政 以仁王 源頼朝 北条時政 維盛 源義仲 安徳天皇 後白河法皇 範頼 義経

・第三単元

和田義盛 大江広元 三善康信 頼家 実朝 後鳥羽上皇 北条義時 泰時 時房 仲恭天皇 後堀川天皇 注・政子 時頼 ジングス汗 フビライ汗 時宗 後深草天皇 後醍醐天皇 足利尊氏 光明天皇 義満 義政 李成桂 マルコポーロ コロンブス バスコ＝ダ＝ガマ 注・種子島時暁

・第四単元

織田信長 豊臣秀吉 徳川家康 足利義昭 明智光秀 秀頼 家光 和子 後水尾天皇 新井白石 吉宗 注・室鳩巢

・第五単元

渡辺崋山 高野長英 林子平 松平定信 家斉 司馬江漢 大塩平八郎 水野忠邦 注・ワシントン リンカン ペリー ハリス 西郷隆盛、大久保利通 木戸孝允 慶喜

・第六単元

福沢諭吉 中江兆民 中村敬宇 西周 板垣退助 後藤象二郎 江藤新平 副島種臣 大隈重信 景山英子 注・中島信行 伊藤博文 岩倉具視 注・李鴻章 孫文 吉野作造 大山郁夫 原敬 リットン 注・斎藤実 注・高橋是清 浜口首相 溥儀 汪精衛 ヒットラー 近衛首相 東条〔内閣〕 小磯〔内閣〕 鈴木〔内閣〕 重光葵 マツカーサー元帥 吉田首相 ドッジ

○文化

・第二単元

仁徳〔陵〕 応神天皇 弓月君 阿知使主 阿直岐 王仁 聖明王 大伴金村 武内宿禰 鞍作止利(鳥仏師) 曇徴 鑑真 聖武天皇 法均尼 行基 淡海三船 石上宅嗣 阿倍仲麻呂 太安麻呂 舍人親王 柿本人麻呂 山部赤人 山上憶良 大伴旅人、家持父子 額田王 大伴坂上郎女 (嵯峨天皇) 小野篁 都良香 在原業平 遍昭 文屋康秀 喜撰法師 小野小町 大伴黒主 紀貫之 和泉式部 藤原俊成 西行 藤原道綱の母 紫式部 清少納言 最澄 空海 空也 源信 定朝 藤原隆能 土佐光長 覺猷 橘逸勢 小野道風 藤原佐理 行成

・第三单元

北条実時 藤原定家 藤原家隆 西行 鴨長明 阿仏尼 法然 親鸞 一遍 日蓮 栄西 道元 運慶 快慶 康弁 藤原隆信 信実 尊円親王 岡崎正宗 加藤景正 一条兼良 三条西実隆 上杉憲実 北畠親房 宗祇 堯慧 万里 世阿弥 注・二条良基 注・観阿弥 蓮如 夢窓疎石 土佐光信 狩野正信 如拙 周文 雪舟 後藤祐乗 フランシスコ・サビエル 注・イグナチウス・ロヨラ

・第四单元

狩野永徳 山楽 海北友松 左甚五郎 千利休 注・後陽成天皇 井原西鶴 近松門左エ門 松尾芭蕉 狩野探幽 尾形光琳 岩佐又兵エ 菱川師宣 注・本あみ光悦 注・俵屋宗達 林羅山 信篤 契沖 賀茂真淵 本居宣長 注・朱子 注・木下順庵 注・三宅かんらん 注・出雲のおくに 式亭三馬 十返舎一九 小林一茶 喜多川歌麿 葛飾北斎 安藤広重 司馬江漢 前野良沢 杉田玄白 伊能忠敬 平賀源内 シーボルト 注・キュルムス 注・王陽明 注・中江藤樹 注・熊沢はん山

・第六单元

新島襄 北里柴三郎 野口英世 大森房吉 石原純 寺田寅彦 小倉金之助 西田幾多郎 内村鑑三 坪内逍遙 尾崎紅葉 二葉亭四迷 幸田露伴 森鷗外 樋口一葉 島崎藤村 土井晩翠 与謝野鉄幹、晶子 国木田独步 田山花袋 島崎藤村 夏目漱石 芥川龍之介 長塚節 石川啄木 武者小路実篤 有島武郎 志賀直哉 永井荷風 谷崎潤一郎 フェノロサ 岡倉天心 狩野芳崖 橋本雅邦 横山大観 川合玉堂 竹内栖鳳 黒田清輝 山下新太郎 和田英作 安井曾太郎 滝廉太郎 エジソン 小山内薫 土方与志 湯川博士 注・アルフレッド、ノーベル

○郷土

・第一单元

大国主命 ヌナカワ姫 アメのカグヤマのミコト 神武天皇

・第二单元

(大国主命) (ヌナカワ姫) ヤマトタケルのミコト キビのタケヒコ (聖徳太子) 皇極天皇 阿倍比羅夫 文武天皇 佐伯石湯 猪名真人大村 (聖武天皇) (行基) 三宅笠雄 鷹 法光尼 平維茂 資長 藤原秀衡 (義仲) 長茂

・第三单元

平盛綱 本間能久 順徳上皇 (後鳥羽上皇) (日蓮) 日印 萩原年景 (親鸞) 藤原資朝 阿新丸 本間三郎 謙宗 鉄牛 護良親王 新田義貞 上杉憲顕 謙信 上杉景勝 (秀吉)

・第四单元

上杉房定 水原秀家 (謙宗) (鉄弁) (宗祇) (堯慧) (上杉謙信) 直江かねつぐ (景勝) 景虎 柴田重家 (信長) (秀吉) (石田三成) 堀秀治 村上義明 溝口秀勝 堀親良 堀忠俊 松平忠輝 伊達政宗 榊原政永 松平光長 小栗美作 川村瑞賢 長尾為景 新次郎 景連 堀親良 堀直寄 牧野忠成 大久保石見守 (芭蕉) 支考 寺門 静軒 柳亭種彦 馬琴 頼山陽 頼春水 良寛 巻菱湖 橘崑崙 山口炊山 佐藤雪山 本田利明 松田伝十郎 鈴木牧之 広川晴軒 宗悦 越陳人 榊原政令 溝口直治 内藤信敦 徳光屋左エ門 青木源左エ門 牧野忠利 久米幸太郎 盛昌 滝沢正弘 菊池寛 堀部安兵衛

生田万 鈴木十郎 百姓太郎、右エ門 遍昭坊 山田村の善兵エ 直江津の福永十三郎 刈羽の難波小左エ門 新潟の湧井藤四郎 川東村の中川伊右エ門
・第五单元
河井継之助 小林虎三郎 [明治] 天皇 前島密 室孝次郎 エブラル 今成無事平 荒川太二 岸宇吉 松田伝十郎 尾崎行雄 レルヒ少佐
・第六单元
赤井景しょう 井上平三郎 風間安太郎 (伊藤博文)、井上馨、松方正義 同室の松田
○研究者
・第一单元
注：エドワード・モース
・第二单元
中村孝也 後藤守一
○年表
・第一单元
孔子 釈迦 キリスト
・第二单元
倭王武(雄略天皇) 英国エドワード王 平忠盛
・第三单元
英国ジョン王 ルーテル マゼラン コペルニクス
・第五单元
支倉常長 クロムウエル 木内宗吾 ルソー ワット ラツクスマン レザノフ ナポレオン モンロー [宣言] マルクス・エンゲルス ダーウイン
・第六单元
片山潜 マルコニー ライト兄弟

本書 1950 年版に記載された人物は 469 名となる（重複を除く）。表 8 の人物を分類と单元ごとに人数を示したのが、以下の表である。

表 9：本書 1950 年版に記載された人物の单元等での人数分布

	政治 社会	(内 外国 人)	文化	(内 外国 人)	郷土	(内 外国 人)	研究 者	(内 外国 人)	合計	時代	時代 別人 数
第一单元	5	(2)	0	(0)	4	(0)	1	(1)	10	原始社会	13
(年表)	0	(0)	3	(3)	0	(0)	0	(0)	3		
第二单元	55	(2)	54	(8)	13	(0)	2	(0)	124	古代社会	127
(年表)	3	(2)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	3		
第三单元	27	(6)	40	(4)	15	(0)	0	(0)	82	封建社会	199
(年表)	4	(4)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	4		
第四单元	12	(0)	40	(4)	61	(0)	0	(0)	113	近代社会	
第五单元	16	(4)	0	(0)	12	(2)	0	(0)	28		

(年表)	7	(5)	5	(5)	0	(0)	0	(0)	12		
第六單元	33	(8)	48	(3)	6	(0)	0	(0)	87		
(年表)	1	(0)	2	(2)	0	(0)	0	(0)	3		130
計	163	(33)	192	(29)	111	(2)	3	(1)	469		469

注：表 8 により作成。

本書 1950 年版に記載された 469 名の内訳は、「政治・社会」に分類した人物が 163 名、「文化」が 192 名、「郷土」が 111 名、「研究者」が 3 名である。その内、外国人が 65 名となる。また、時代別に見ると、「原始社会」が 13 名、「古代社会」が 127 名、「封建社会」が 199 名、「近代社会」が 130 名である。「封建社会」の時代の人名が多い。「郷土」「研究者」を除いて「政治・経済」「文化」に分類した人物に限定すると 355 名となる（「原始社会」が 9 名、「古代社会」が 114 名、「封建社会」が 123 名、「近代社会」が 112 名）。「古代社会」「封建社会」「近代社会」の人名は 112～123 名とほぼ同様の数であるが、「封建社会」が一番多い。また「郷土」の中でも「封建社会」の時代の人数（76 名）が突出して多くなっている。

以上の数字がどのような意味を持つのかを確認するため、1946 年発行の国民学校用の『くにのあゆみ』・旧制中学校用の『日本の歴史』の 2 冊と比較する。本書 1950 年版の時代区分に合わせ、掲載された人物を「政治・社会」と「文化」に分類した人数を表にすると以下ようになる（両書ともに「郷土」「研究者」に該当する人名記載はない）。

表 10：本書 1950 年版の時代区分による『くにのあゆみ』の時代別人名数

	該当箇所	政治・社会	(内 外国人)	文化	(内 外国人)	計	(内 外国人)
原始社会	第一	3	(0)	2	(0)	5	(2)
古代社会	第二～第三	37	(0)	4	(1)	41	(1)
封建社会	第四～第八	47	(2)	38	(1)	88	(3)
近代社会	第九～第十二	42	(11)	19	(2)	61	(13)
	計	129	(13)	66	(6)	195	(19)
	(年表のみ)	4	(4)	6	(6)	10	(10)
	総計	133	(17)	72	(12)	205	(29)

注：文部省『くにのあゆみ』上・下（日本書籍、1946 年 9 月 5 日翻刻発行）により作成。

表 11：本書 1950 年版の時代区分による『日本の歴史』の時代別人名数

	該当箇所	政治・社会	(内 外国人)	文化	(内 外国人)	計	(内 外国人)
原始社会	一章	4	(3)	0	(0)	4	(3)
古代社会	二～五章	131	(4)	52	(9)	183	(13)
封建社会	六～十章	136	(9)	168	(8)	304	(17)

近代社会	十一～十六章	120	(35)	79	(16)	199	(51)
	計	391	(51)	299	(33)	690	(84)
	(年表のみ)	4	(4)	6	(6)	10	(10)
	総計	395	(55)	305	(39)	700	(94)

注：文部省『日本の歴史』上・下（中等学校教科書株式会社、1946年10月19日翻刻発行）により作成。

掲載された人物名の総計は、『くにのあゆみ』が205名、『日本の歴史』が700名であった。本書1950年版の469名はその中間となる（「郷土」「研究者」を除いた「政治・社会」「文化」に限定すると355名）。戦後における旧制小学校（国民学校）と旧制中学校の中間にあたる人数の歴史上の人物を取り上げて、新制中学校の日本史教科書が作成されている。単純な比較はできないが、2019年の中学校社会科歴史的分野の8社の教科書における人物を調査した藤井大亮氏の分析によれば、最少で248名、最多で431名、平均315名の人物が記載されているという⁴⁰。約70年前の発行であることを考慮すると、本書1950年版が相対的に多くの人物を記載した教科書であることが指摘できる。日本史教科書の中の外国人名の割合は、『くにのあゆみ』が14%、『日本の歴史』が13%、本書1950年版が14%である。ほぼ同じ割合であるのが興味深い。なお、本書1950年版の「郷土」「研究者」を除いた「政治・社会」「文化」に限定すると18%が外国人となり、その割合が多くなっている⁴¹。

時代に注目すると『くにのあゆみ』『日本の歴史』ともに「封建社会」に当たる人物名が最も多い。本書1950年版と同様の傾向が見られることが確認できる。藤井氏の分析では2019年の8社平均で、古代42名、中世47名、近世75名、近代122名、現代27名となり、近代が多いと指摘している⁴²。本書の「封建社会」がおおむね該当する中世・近世は計122名となり、近代と同数になるが、2019年の教科書と比べて本書1950年版は、相対的には「封建社会」の人物名が多い傾向にあったことが確認できる。

分類に注目すると『くにのあゆみ』『日本の歴史』ともに「政治・社会」の人物が多い。『日本の歴史』は「政治・社会」56%、「文化」44%であるが、特に『くにのあゆみ』は「政治・社会」65%、「文化」35%となっている。小学校では政治・社会の流れを中心として中学校では文化にも視野を広げた形になっている。本書1950年版では、「郷土」「研究者」を除いた「政治・社会」と「文化」の割合は46%と54%であり、「文化」がはるかに多くなっている。藤井氏は、2019年では政治関係が33.87%、文化関係が34.90%という割合になっていることを分析している⁴³。今日か

⁴⁰ 藤井大亮「歴史的な見方・考え方としての歴史的意義の概念の探求—歴史上の人物に関する教科書分析と質問紙調査を通して—」（『東海大学課程資格教育センター論集』第18号、2019年、7頁）。

⁴¹ 同上（8～9頁）によると、2019年において「外国人」の割合は全体で21.65%であるという。

⁴² 同上、7頁。

⁴³ 同上、8～9頁。ちなみに藤井氏は「政治に関係がある人」（33.87%）、「国際交流に力をつけた

ら見ても、本書 1950 年版の「文化」の位置の大きさが確認できる。

4-3. 本書における「郷土史」

本書の特徴は書名にあるように郷土史が加味されている点である。以下のように、すべての单元において郷土について組み込まれている。

表 12：本書 1950 年版における郷土史の記述箇所および『新潟県史物語』の該当ページ

第一单元 原始社会はどのようなものであつたか	
五、其の頃の郷土のようす	
郷土に住んでいた人々	【1・2】
文化のひびき	【2・3】
郷土の遺跡と遺物	【4・5】
第二单元 古代の社会はどのようにして統一され人々はどんな生活をしていたか	
一、大和朝廷の統一	
郷土のようす	【はしがき(図)・3・4】
三、律令国家の発展	
エゾを打つ根拠地となつた越後	【6～8】
五、人々の生活	
越後の国の誕生と発展	【8～11】
七、平安の文化	
平安のころの新潟県	【12・13】
八、荘園の発達	
このころの郷土	【14・15】
第三单元 封建社会はどのようにして成長し、どのようにして展開したか	
一、封建社会の成立	
鎌倉幕府	
郷土では	【15・16】
承久の変	
郷土では	【17・18】
二、鎌倉の文化	
仏教	
郷土では	【17】
四、封建社会の変動	
建武の新政	
郷土では	【17】
五、東山文化	
学問・文学	【五山文学】 【24】
連歌	【24】

人 (3.05%)、「外国人」(21.65%)、「地域のために力をつくした人」(6.53%)、「文化の発展に力をつくした人 (思想・技術・美術など)」(34.90%) に分けている。

六、戦国時代	
群雄割拠	
郷土では	【19】
第四单元 封建社会はどのようにして確立され、人々の生活はどのように営まれたか	
一、全国の統一	
このころの越後	【24・25】
二、江戸幕府の成立	
幕府の成立	
徳川氏によって分割された越後	
上杉景勝	【22～24・27】
松平忠輝と高田	【27～29】
高田の発展のあと	【28・29】
長岡発展のあと	【29・30】
村上、新発田、その他	【32・33】
町人の社会	
城下町のようす	【33・34】
六、幕府政治の変遷	
郷里における学問、文芸など	【40～42】
この頃の越後の産業	【37・38】
七、文化文政の文化	
郷里に於ける封建社会の世相	【35・36・39】
第五单元 近代の社会はどのようにして成立したか	
四、文明開化	
郷里に於ける新しい時代	
米百俵	【44・45】
明治天皇の巡幸	【46】
日本郵便の父	【46・47】
県下最初の鉄道	【47】
社会のありさま	【47・48】
第六单元 近代の社会はどのように進展したか	
一、自由民権運動	
高田事件（自由党の弾圧）	【46】

注1：本書1950年版により作成。囲みが郷土史に関わる部分である。

注2：稲荷弘信『新潟県史物語』（高田工業高等学校、1949年）で記載されている箇所を【 】で示した。

原始社会・古代社会・封建社会・近代社会のそれぞれの時代について郷土史に触れている。掲載された469名のうち111名が郷土史として取り上げられている⁴⁴。111名の時代での内訳は原始社会4名、古代社会13名、封建社会76名、近代社会18名であり（表9参照）、郷土史についても封建社会の重視は際立っている。一方で、近代社会については明治初年までを基本としており、「自由民権運動」での1883（明治16）

⁴⁴ ただし郷土史の111名は、郷土の人物のみではなく、郷土に関連した人物で、なおかつ他の箇所では掲載されていない人物を含めた人数である。

年の高田事件以後についての郷土への言及はほとんどない⁴⁵。

郷土の範囲は新潟県を基本としている。時代により濃淡はあるが、各時代での新潟県の状況を理解できるように記述がなされている。政治に関わる為政者に限らず、産業に関わる各地の人物も取り上げられており、特に文化面で活躍した人物を重視している。また、新潟県に関わった様々な人物も取り上げられている。一概には言えないが、高田を中心とした地域について特に意識して記述している傾向が指摘できる。

本書の郷土史記述については、「はじめに」で「高田工業学校の稲荷弘信先生の貴重な御研究を入れさせていただきました」（本書 1950 年版）と述べている。これは、1949 年 10 月に発行された稲荷弘信『新潟県史物語』のことを指している。『新潟県史物語』は本文 48 頁の冊子であり⁴⁶、その「はしがき」によれば、「昨年〔1948 年：引用者〕の夏休に一年生の生徒が、図書館であつめてきたものをまとめたもの⁴⁷」と説明されている。「一、国史のあけぼの」から「十四、明治維新」までの新潟県の歴史を簡潔に述べたものである⁴⁸。表 12 を見ると、本書の郷土史記述は、基本的に『新潟県史物語』から抜粋する形で構成されていることが確認できる。ただし記載の項目は選ばれており、掲載の順序も適宜に修正されている。また、一部に『新潟県史物語』にはない記述もいくつか存在する。例えば、第二单元・「一、大和朝廷の統一」の「郷土のようす」に、1949 年の考古学者・後藤守一の調査によって「当地方第一のものとの折紙がつけられている⁴⁹」原通村（現・妙高市）の古墳について追加し、そして第六单元・「一、自由民権運動」の「高田事件（自由党の弾圧）」に、『新潟県史物語』では簡単に触れられているだけの高田事件について詳細に説明をしている。上越地域に関する事項への注目が促されている。

すべての国民が学ぶ新制中学校での社会科日本史の中で、高田市の中学生在がどのような郷土史を学ぶべきかを、当時検討が進められていた郷土史をもとにして模索されていたものであると位置づけることができる。

4-4. 本書における郷土・日本・世界

⁴⁵ 「文明開化」での「社会のありさま」の最後に「又明治四十四年〔1911 年：引用者注〕にはオーストリア人レルヒ少佐が高田でスキーを教えた」と添えられている（本書 1950 年版、140 頁）。

⁴⁶ 『新潟県史物語』の詳細は次のとおりである。編集兼発行人・稲荷弘信、発行所・高田高等工業学校（高田工業高等学校：引用者）、1949 年 10 月 30 日発行。表紙、「はしがき」（1 頁分）、「目次」（1 頁分）、本文（1～48 頁）、年表（1 頁分）、奥付で構成されている。

⁴⁷ 同上、「はしがき」。引用中の「一年生」は併設中学校 1 年生を指す（稲荷弘信『新潟県の歴史』新潟県立高田工業高等学校、1950 年 12 月 15 日、97 頁）。

⁴⁸ なお、稲荷弘信はその後 1950 年 12 月に、より詳細な『新潟県の歴史』（前掲、本文 97 頁）を執筆するなど、郷土史の著作・論文を手掛けている。稲葉については『頸城文化』第 41 号（1983 年 8 月）掲載の追悼文を参照した。

⁴⁹ 本書 1950 年版、27 頁。なお、その後の研究において古墳ではなかったことが指摘されている。

本書における「郷土史」「日本歴史」は以上のようなものであるが、ここで本書における世界史についても確認しておきたい。

戦前の国史教科書においても自国史に関わる外国史（世界史）記述は存在した⁵⁰。本書でも日本の対外関係や対外交流については、その背景に関わる世界史を含めて記述されている。その他にも本書の世界史の内容に関わり、特に注目すべき点がいくつかある。まず、上述したように「人類の始まり」として化石人類から本書は日本史を書いている。これは人類史の要素を歴史教育に取り入れたことを意味しており、世界史の中の日本という歴史の捉え方を端的に示している。1946 年の『くにのあゆみ』『日本の歴史』は神話から始める日本史からは脱却していたが、人類史は取り入れていなかった。「第一單元」の「研究問題」においても、「一、地球がどう変化し、動物や植物や、そして人類が、どのように生れ、どう発達してきたかを研究しよう」、「二、人類がどのようにして火の使用や、言語の使用、農耕のしかた、道具の作り方などを考え出していつか具体的に研究してみよう」（本書 1950 年版、18 頁）という課題が提示されている⁵¹。

また「第五單元 近代の社会はどのようにして成立したか」の「二、近代えのあゆみ」の前半部分で、欧米の産業革命（「新しい産業」）といわゆる市民革命（「新しい精神」「人民の力」）について記述している。「新しい精神」ではイギリスの議会制度確立、アメリカ独立宣言、フランス革命について述べて、「人民の力」ではリンカンの言葉を引用して、「近代の歴史は民主々義発達の歴史」、「自由と人権の尊重こそは近代の特色」と強調している（本書 1950 年版、131 頁）。「研究問題」では、「五、アメリカの独立とフランスの革命について参考書でしらべてみよう」という課題が提示されている。目指すべきモデルとして欧米の近代市民社会が設定されたのは、敗戦以後の日本の全体的な傾向であった。高田市の中学生を対象とした本書においても、それを積極的に位置づけている。「研究問題」の「四、封建的なものの考え方や見方が今の生活にもどのようにのこっているかをあげて討議してみよう」という課題を見ると、当時の中学生の生活に関わる重要な問題として捉えられていたのがうかがえる⁵²。

本書に 5 つある年表には「外国」の欄が設けられている⁵³。「エジプト、バビロニヤ 七〇〇〇年も前に金属器を使う。」から「国際連合できる、原子爆弾（一九四

⁵⁰ 戦前の国史教科書における世界史（外国史）の位置づけや役割については、茨木智志「国定日本史教科書の中の外国史が担った役割—歴史教育における自国史と世界史を考える前提として—」（松田 慎也監修『社会科教科内容構成学の探求』風間書房、2018 年）を参照されたい。

⁵¹ ただし、本書 1951 年版ではこの 2 つの「研究問題」は削除されている（本書 1951 年版、18 頁）。

⁵² 封建社会における「家族制度」について「家長権」「家業の世襲と封建道徳」について述べた箇所ので、「欧米の封建制度に対して起ったヒューマニズムの高唱である」ルネサンス当時のヨーロッパとの「ちがいの甚し」さを指摘した一文もある（本書 1950 年版、108～109 頁）。

⁵³ 本書の年表には「世紀」「社会」「社会の発展」「紀年」「年号」「おもな事項」「外国」の欄がある。

五)」まで 70 の記載がある。この「外国」欄には本文で触れられていない事項や文も多く盛り込まれている。表 8 の「年表」のみに記載された人名にはその一端が示されている。各記載は基本的に従来の東洋史と西洋史、つまり中国・朝鮮そして古代オリエント・古代ギリシアローマを含めた欧米を中心としたものとなっている⁵⁴。日本史教科書の年表に本文では触れられていない世界史の内容を盛り込むことは 1946 年の『くにのあゆみ』『日本の歴史』でも見られるので、これを踏襲したものと思なされる。ただし、本書ではより充実した年表を作成しており、年表を通じて世界史の中に日本史を位置づける意図が確認できる。

本書は、書名にあるように、郷土史を加味した日本史に取り組んだものである。加えて、世界史についても郷土史や日本史に関わって取り入れることが目指されている。その世界史の内容や郷土史・日本史とのつながりは、もちろん今日から見れば種々の指摘が可能である。しかし、1949 年 4 月に高校社会科で新科目「世界史」が初めて実施された状況であったことを考慮すると、郷土・日本・世界をつなげた形で中学校社会科の歴史教育に取り組んだ、ごく初期の試みであると評価できる。

4-5. 本書における「研究問題」

本書では單元ごとに生徒への「研究問題」が掲載されている（稿末の資料 3 を参照）。『くにのあゆみ』では簡単なものながら「第一」から「第十二」の章ごとに「問題」が掲載されていたが、『日本の歴史』にはなかった。中学校の社会科日本史の学習指導要領はまだなかった時期であるので、その他の社会科の学習指導要領を参考にして作成したものと考えられる。

「研究問題」は 44 題ある。題材は社会、生活、環境、文化などが取り上げられ、農民、貴族、武士、労働者、天皇などの人々、また様々な活動をした人々についても研究の対象とされている。基本は調べてまとめる作業であり、原因や様子、相違などの特徴に注目させている。また、視点の転換、現代や今日の生活とのかかわりとの比較などを通して、題材の意味を考えるものもある。上述したように世界史に関わる内容との比較や地域に関わるものも提示されている。調べるもととなるのは本書を含めた各種文献だと思われるが、その一方で遺跡、史料、日記、物語などもあげられており、作図・作表などの指示も見られる。そして、調べてまとめた結果を、発表・報告、劇化、話し合い・討議会などを通して、生徒同士の学習を深めることが目指されている。

歴史を単純に知識の獲得ではなく、社会科としての歴史学習を「研究問題」を通じて進めようとしたものとなっている。

おわりに — 『郷土史を加味せる新しい中学の日本歴史』が目指したもの —

⁵⁴ 「アラビヤ人の南洋貿易いよいよさかんになる（八一十五世紀）」という記載もある（本書 1950 年版、89 頁）。

本書は、1947年度から始まった新制中学校の社会科日本史に対して新潟県高田市の大町中学校において検討を進めた成果であり、同時に経過を示した準教科書である。敗戦以後に戦後に相応しい教育のあり方を検討し、1949年7月に大町プランの報告を実施していた大町中学校の社会科研究部の教員たちが、新制中学校用の社会科日本史の検定教科書が存在しなかった現状を鑑みて、新潟県高田市の中学生が学ぶべき歴史を検討して編集したものとなる。その際に、題名にあるように「郷土史を加味」したのが一番の特徴である。そして全体的に文化が重視されている。さらに郷土・日本・世界をつなげた形で中学校社会科の歴史教育を試みている。この点は今日でも課題の一つになっている。

本書が作成されたときは、すべての中学生が義務教育として学ぶ社会科日本史について参照できるものはほとんどなかった。そのような中で、戦前からの従来の国史教育とは異なる社会科としての新たな歴史教育のあり方を、当時の新潟県高田市の中学生たちを対象にして、中学校の社会科教師たちが具体的に検討したものであった。

本稿は、本書の特徴の一端を示したものであるが、本書の特徴の詳細を明示するためには、社会科日本史の全国的な展開についての研究、さらには新潟県高田市を含めた新潟県もしくは上越地域での日本史（国史）の教育・研究、そして地域史（郷土史）の教育・研究に対する検討が必要であることを痛感した。今後の課題としたい。

後記

本書や関連資料の利用に格別のご協力をいただいた上越市立高田図書館、宮城教育大学附属図書館、東京大学大学院教育学研究科・教育学部附属図書室、上越教育大学附属図書館の皆様に御礼を申し上げます。

また、当時の大町中学校に勤務され、数々の貴重なご教示や資料をご提供くださった長谷川^{すすむ}新先生が2023年10月に97歳で逝去されました。この場をお借りして、長谷川先生への心からの感謝を申し上げますとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

資料1：新潟県高田市立大町中学校社会科研究部編『郷土史を加味せる新しい中学の日本歴史』（大町中学校、1950年6月20日）の内容

凡例

- ・上越市立高田図書館所蔵のものを利用した。
- ・原文の縦書きを横書きとした。漢字の旧字体は新字体とした。その他の表記は原文のままである。数字は該当のページである。
- ・単元、一・二・三…、小見出しを記載した。目次と異同がある場合は本文に従った。
- ・本文の上欄に書かれた頭注もしくは重要語句の掲載については【 】に記載した。ただし頭注の説明部分は省略した。
- ・郷土史に関わる記述のある箇所は□で囲った。

はじめに、(1 頁分)

目次、(2 頁分)

第一単元 原始社会はどのようなものであつたか、1～19

一、人類の始まりと私たちの国土、1～3

人類の始まり【ピテカントロプス・エレクトス（直立猿人） シナントロプス
ペキネン（北京人類） 他石人類^{ママ} ピルツダウン人 ハイデルベルグ人 ネ
アンデルタル人 クロマニオン人】

日本列島のおいたち【打製石器 旧石器時代 洪積世 磨製石器】

二、私たちの祖先の生活、3～7

私たちの祖先【コロボツクル説 アイヌ説 原日本人説】

遠い祖先の生活【竪穴式住居 採集経済 貝塚 縄文式土器 縄文式文化 氏族社
会 原始共同体 原始宗教 屈葬 土偶 土面】

三、農耕の始まりと生活の進歩、7～12

新しい文化のおとずれ【青銅器 鉄器 金石併用時代】

農耕の始まり【当時の大陸 石包丁 弥生式土器 弥生式文化】

金属器の伝来【青銅器時代 鉄器時代 銅剣・銅鉾・銅鐸】

集落の変化【母系制 家父長制 貧富の差 村の支配者 合口甕棺 部落国家】

四、中国の記録からみた日本のようす、12～16

原始国家の分立【登呂遺跡 楽浪郡 前漢書地理志 後漢書東夷伝 倭の奴国 印
授^{ママ} 生口】

邪馬台国のありさま【邪馬台国 魏志倭人伝 卑弥呼】

その頃の生活、風俗

五、其の頃の郷土のようす、16～18

郷土に住んでいた人々【ツングース族】

文化のひびき【コシ ヌナカワ姫】

郷土の遺跡と遺物

研究問題、18

年表、18～19

第二單元 古代の社会はどのようにして統一され人々はどんな生活をしていたか、20～64

一、大和朝廷の統一、20～27

大和朝廷の統一【天皇】

朝鮮との関係【日本府 好太王の碑】

古墳文化【前方後円墳】

氏姓制度【氏の制度 姓の制度】

大陸文化のうけいれ【文字の伝来 仏教の伝来】

郷土のようす

二、大化の改新、28～33

聖徳太子の新政【冠位十二階 十七条憲法 遣隋使】

飛鳥文化【飛鳥文化】

大化改新【改新の内容 国司、郡司】

改新後の動き

三、律令国家の発展、33～37

律令の制定【大宝律令 養老律令 口分田】

のびゆく力【城、柵 駅 和同開珎】

外国との交通【遣唐使】

エゾを打つ根拠地となつた越後

四、天平の文化、37～42

奈良の都【平城京】〔中村孝也先生〕

仏教【国分寺 国分尼寺 六宗 光明皇后】

美術工芸【正倉院】

学問文学【懷風藻 古事記 日本書紀 風土記 万葉集】

五、人々の生活、42～46

庶民の生活【貧窮問答歌】

土地の私有化【三世一身の法 永久の私有 荘園のおこり】

政治のみだれ

越後の国の誕生と発展

六、律令国家のくずれ、46～48

律令政治のたてなおし【平安京 勘解由使 健児制 令外の官 格式】

摂関政治【摂政関白】

七、平安の文化、48～54

唐風の文化【遣唐使の廃止 隋—唐—五代—宋—元（蒙古）】

文化の日本化

国文学【平がなの発明 古今和歌集】

仏教【天台宗 真言宗 僧兵 末法思想】

美術工芸【^{ママ}健築 彫刻 絵画 書道 工芸 衣服】

平安のころの新潟県

八、荘園の発達、54～61

地方の政治【不輸 荘園の増加 不入 遥任 荘園の組織】

武士のおこり【源氏 平氏】

平氏と源氏【保元の乱 平治の乱 平氏の全盛 福原遷都 源頼朝 源義仲】

このころの郷土

研究問題、61～62

年表、62～64

第三单元 封建社会はどのようにして成長し、どのようにして展開したか、65～90

一、封建社会の成立、65～68

鎌倉幕府の成立え【御家人制度】

守護地頭【守護 地頭】

武士と貴族

鎌倉幕府【侍所 公文所 問注所】

郷土では

承久の変【^(ママ)六羅探題】

郷土では

執権政治【評定衆 貞永式目】

二、鎌倉の文化、69～73

新しい文化

学問

文学【源実朝の詠歌 小倉百人一首 西行法師】

仏教【浄土宗 真宗 法華宗 禅宗】

郷土では

美術工芸

建築

彫刻

絵画

似絵

書道

工芸

三、封建社会の発展、73～76

産業交通の発達【二毛作 馬借 関銭 問丸 借上】

蒙古来襲

武士の不満【徳政令】

四、封建社会の変動、76～82

建武の新政【元弘の変 庄田院令 南北朝】

郷土では

室町幕府の成立【段銭 棟別銭 土倉】

守護の勢力の増大

農民の新らしい動き【土一揆】

産業の発達

商業の発達【座】

五、東山文化、82～85

文化の特色

学問・文学【五山文学 庶民文学としてのお伽草子 連歌 猿楽 謡曲】

仏教

美術工芸

六、戦国時代、85～86

応仁の乱【汝や知る都は野辺の夕ひばり上るを見てはおつる涙を】

群雄割拠【下剋上】

郷土では

七、大陸とのつながり、86～88

大陸とのつながり【倭寇 勘合貿易】

ヨーロッパとのつながり【ポルトガル船漂着 鉄砲伝来 フランシスコ・サビエル】

きりすたん文化【ポルトガル語 スペイン語】

研究問題、88～89

年表、89～90

第四单元 封建社会はどのようにして確立され、人々の生活はどのように営まれたか、91～123

一、全国の統一、91～97

統一への動き

織田信長【室町幕府の滅亡 宗教勢力の打破 楽市、楽座】

豊臣秀吉の統一【検地 刀狩 知行制度】

文化の特色【朱印船 建築 絵画、彫刻 陶磁器 茶の湯】

このころの越後

二、江戸幕府の成立、97～109

豊臣氏の滅亡【関が原】

幕府の成立【幕府の直轄地 幕府の職制 諸大名の統御 武家諸法度 公家諸法度】

徳川氏によつて分割された越後

上杉景勝

松平忠輝と高田

高田の発展のあと

長岡発展のあと

村上、新発田、その他

階級制度と生活【階級的な組織】

農村の社会【農民の生活と慶安の触書 年貢 五人組制度 村役人 直訴 農民の
楽しみ 農業技術の進歩 封建制度のゆらぐもと】

町人の社会【都市の発達 五街道 航路 町人の実力】

城下町のように

家族制度【家長権 家業の世襲と封建道徳 ルネサンス】

三、鎖国、109～110

幕府の対外政策

鎖国【島原の乱 キリスト教徒の弾圧】

四、封建社会の確立、110～111

五、元禄の文化、111～114

【文化の特色】

文学【井原西鶴 近松門左エ門 松尾芭蕉】

美術工芸【狩野探幽 尾形光琳 浮世絵 菱川師宣】

学問【朱子学 昌平坂学問所 国学】

六、幕府政治の変遷、114～118

【白石の政治 吉宗の政治 打こわし 御定書百ヶ条 目安箱】

郷里における学問、文芸など

この頃の越後の産業

七、文化文政の文化、118～123

遊里と芝居【歌舞伎】

文学【式亭三馬 十返舎一九 小林一茶 川柳・狂歌】

絵画【浮世絵】

洋学【解体新書 シーボルト】

陽明学【陽明学】

郷里に於ける封建社会の世相

研究問題、123

第五单元 近代の社会はどのようにして成立したか、124～142

一、封建制度の崩壊、124～130

下級武士の窮乏【下級武士の生活】

商業の発達と農民の窮乏【商業の発達 マニファクチャー 産業の発達 封建制度
のむじゅん】

学問のえいきよう

政治の改革【定信の改革 忠邦の改革 人返し 専売制度】

二、近代えのあゆみ、130～134

新しい産業【産業革命】

新しい精神【イギリスの議会制度 アメリカの独立宣言 フランス大革命】

人民の力

開港【欧米諸国の東洋進出 開国】

開国のえいきよう

民衆の動き【倒幕の運動 安政の大獄 幕府の滅亡】

三、明治維新、134～137

新政府の方針【五ヶ条の御誓文】

封建制度の廃止【版籍奉還と廃藩置県 四民平等】

地租の改正

農民及士族の不平【士族の商法 自由民権運動】

四、文明開化、137～140

時代の流行

不平士族の武力反抗

郷里に於ける新しい時代

米百俵

明治天皇の巡幸

日本郵便の父

県下最初の鉄道

社会のありさま

研究問題、140

年表、141～142

第六單元 近代の社会はどのように進展したか、143～166 (167)

一、自由民権運動、143～147

名ばかりの自由【藩閥政治】

自由の叫び【福沢諭吉 板垣退助】

国会開設への運動【政社 自由党 改進黨】

憲法発布

見かけだけの議会

条約改正【治外法権 関税自主権】

高田事件（自由党の弾圧）

二、資本主義の発達と近代産業、147～151

西洋に於ける産業革命

日本の産業革命【富国強兵 官営工業 日英同盟】

資本主義の発達

海外市場

日清戦争【天津条約 下関条約】

北清事変

日露戦争

日韓併合

資本主義の大前進

三、近代文化、152～155

学問【慶應義塾】

宗教

文芸【新体詩 写実主義 新ローマン主義 自然主義】

美術

音楽

映画、ラジオ、演劇

四、帝国主義のあらわれ、155～158

国際間の不安【帝国主義】

第一次世界大戦【ベルサイユ条約】

二十一条条約【二十一条条約 排日思想】

人民の生活

政党のふはい

侵略主義の開始【五・一五事件 二・二六事件】

五、太平洋戦争、158～162

軍国主義のかたまり^(ママ)

満州事変

軍国主義万能

中日事変

日独伊三国防共協定

第二次世界大戦【三国同盟】

太平洋戦争【日米会談】

六、民主日本の建設、162～166

ポツダム宣言

日本国憲法【主権在民 基本的人権 戦争放棄】

国民の動き【労働組合 農地改革 財閥の解体 信教の自由 政党の復活】

政治、経済【新警察制度 経済九原則】

文化【湯川博士（ノーベル賞） 新教育制度】

平和への出発

研究問題、166

年表、(167)

をわりに、(奥付)、(1 頁分)

資料 2：新潟県高田市立大町中学校社会科研究部編『郷土史を加味せる新しい中学の日本歴史』（大町中学校、1951 年 6 月 5 日）の内容

凡例

- ・宮城教育大学附属図書館所蔵のものを利用した。
- ・記載の方法は資料 1 に準じた。
- ・本書 1950 年版（資料 1 参照）との異同を下線で示した。

はじめに、3～5

目次、6～7

第一単元 原始の社会はどのようなものであつたか、1～19

一、人類の始まりと私たちの国土、1～3

人類の始まり【ピテカントロプス・エレクトス（直立猿人） シナントロプス
ペキネン（北京人類） 化石人類 ハイデルベルグ人 ピルツダウン人 ネ
アンデルタール人 クロマニオン人】

日本列島のおいたち【打製石器 旧石器時代 磨製石器】

二、私たちの祖先生活、3～7

私たちの祖先【コロボツクル説 アイヌ説 原日本人説】

遠い祖先の生活【竪穴式住居 採集経済 貝塚 縄文式土器 縄文式文化 氏族社会 原始宗教 屈葬 土偶 土面】

三、農耕の始まりと生活の進歩、7～12

新しい文化のおとずれ【青銅器 鉄器 金石併用時代】

農耕の始まり【当時的大陸 弥生式土器 弥生式文化】

金属器の伝来【青銅器時代 鉄器時代 銅剣・銅鉾 銅鐸】

集落の変化【母系制 家父長制 村の支配者 部落国家】

四、中国の記録からみた日本のようす、12～16

部落国家の状況【登呂遺跡 楽浪郡 前漢書地理志^{ママ} 後漢書東夷伝^{ママ} 印授^{ママ} 生口】

邪馬台国のありさま【邪馬台国 魏志倭人伝 卑弥呼】

その頃の生活、風俗

五、その頃の郷土のようす、16～18

郷土に住んでいた人々【清野博士の説】

文化のひびき【こし めながわ姫】

郷土の遺跡と遺物

研究問題、18

年表、18～19

第二単元 古代の社会はどのようにして統一されどのように発展したか、20～64

一、大和国家の統一、20～27

大和国家【天皇】

朝鮮半島への進出【三韓 日本府 好太王の碑 宋書夷蛮伝】

古墳【古墳 仁徳陵 埴輪 副葬品 高床式住居】

氏姓社会の成立【氏族 姓 氏族と豪族 部 奴婢 田荘 屯倉】

氏と信仰【太占】

大陸文化のうけいれ【弓月の君と阿知使主 文字の伝来 王仁 仏教の伝来

蘇我氏崇仏 物部氏排仏】

社会のゆきづまり【貴族の富と力】

郷土のようす

二、律令国家の発展、27～33

聖徳太子の新政【聖徳太子 摂政 冠位十二階 十七条憲法 遣隋使】

飛鳥文化【飛鳥文化 法隆寺 絵画 美術品】

大化改新【公地 公民 壬申の乱】

律令の制定【大宝律令 刑罰 政治組織 職田 位田 功田】

班田収授法【^{ママ}国分田 租 庸調】

エゾを討つ根拠地となつた越後【伝説によれば】

平城京【奈良の都—中村孝也先生の文中より 東北地方 九州 七道の開発 遣唐使 和銅開珎】

天平文化【天平文化 国分寺 国分尼寺 東大寺 白鳳文化 建築 彫刻 東院堂 東大寺不空罽索観音 正倉院 学問 懷風藻 古事記 日本書紀 風土記 万葉集 おくつき】

越後の国の誕生と発展【佐渡 越後国府 佐渡国府 国分寺の建物】

社会のようす【出挙 三世一身法 永久私有 貧窮問答歌

三、律令国家のくずれ、40～52

【藤原氏系図】

平安京【平安京 健児制 勘解由使 蔵人所 檢非違使 令外の官】

荘園の発生【戸籍 荘園の組織 不輸不入】

郷土の実状【南蒲原郡の古河荘は… 産物 宇治拾遺物語に…】

摂関政治【関白 荘園と藤原氏の生活 遥任】

武士のおこり【武士の棟梁となつたもの 滝口の武士 追捕使 押領使 地方豪族の勢力の基礎 源氏 武士は…】

院政【上皇 僧兵 延暦寺 興福寺 平氏】

平安の文化【詩人 学校 遣唐使廃止 隋—唐—五代—宋—元 真言宗 天台宗 河内観心寺 山城神護寺 絵画 国文学 物語 大和物語 宇津保物語 源氏物語 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記 和泉式部日記 六歌仙 古今集 かなの発明 貴族の生活 男子 寝殿造 貴族の信仰 空也 源信 絵画 大和絵が発達… 浄土教 末法思想 田楽 白拍子】

越後の武士

研究問題、52～53

年表、53～56

第三单元 封建社会はどのようにして成長し、どのように展開したか、56～59

一、封建社会の成立、56～

鎌倉幕府の成立【征夷大將軍 政所 問註所 侍所 守護 地頭 御家人】

承久の変【^(ママ)六羅探題】

郷土では

執権政治【評定衆 貞永式目】

二、鎌倉の文化、59～63

新しい文化

宗教

学問【朱子学】

和歌【源実朝の詠歌 小倉百人一首 西行法師】

建築【遠侍 下人】

彫刻

絵画

書道

工芸

三、封建社会の成長、63～66

武士と社会

農民

産業の発達【問丸 為替】

初期封建社会のくずれ【徳政令】

四、封建社会の変動、66～70

鎌倉幕府の衰え

建武の新政【南北朝】

室町幕府と武士

自由都市【座】

土一揆

五、東山文化、70～73

学問【庶民文学としてのお伽草子】

連歌【連歌】

宗教

絵画

庭園

茶道

猿楽【猿楽 謡曲】

六、戦国時代、73～74

応仁の乱

群雄割拠【下剋上】

郷土では

七、大陸とのつながり、74～76

大陸とのつながり【倭寇 勘合貿易】

ヨーロッパとのつながり【ポルトガル船漂着 鉄砲伝来 フランシスコ・サビエル】
きりしたん文化【ポルトガル語 スペイン語】

研究問題、77

年表、77～78

第四単元 封建社会はどのようにして確立され、人々の生活はどのように営まれたか、79
～111

一、全国の統一、79～85

統一への動き

織田信長【室町幕府の滅亡 宗教勢力の打破 楽市、楽座】

豊臣秀吉の統一【検地 刀狩 知行制度 自由都市】

文化の特色【朱印船 建築 絵画、彫刻 陶磁器 茶の湯】

このころの越後

二、江戸幕府の成立、85～97

豊臣氏の滅亡【関が原】

幕府の成立【幕府の直轄地 幕府の職制 諸大名の統御 武家諸法度 公家諸法度】

徳川氏によって分割された越後

上杉景勝

松平忠輝と高田

高田の発展のあと【新潟発展のあと】

長岡発展のあと

村上、新発田、その他

階級制度と生活【階級的な組織】

農村の社会【農民の生活と慶安の触書 年貢 五人組制度 村役人 農民の楽しみ
直訴 農業技術の進歩 封建制度のゆらぐもと 都市の発達 五街道 航路
町人の実力】

城下町のようす

家族制度【家長権 家業の世襲と封建道徳】

三、鎖国、97～98

幕府の対外政策

鎖国【島原の乱 キリスト教徒の弾圧】

四、封建社会確立、98～99

五、元禄の文化、99～102

【文化の特色】

文学【井原西鶴 近松門左エ門 松尾芭蕉】

美術工芸【狩野探幽 尾形光琳 浮世絵】

学問【朱子学 昌平坂学問所 国学】

六、幕府政治の変遷、102～106

【白石の政治 吉宗の政治 打こわし 御定書百ヶ条 目安箱】

郷里における学問、文芸など

この頃の越後の産業【郷土における新田開発のようす】

七、文化文政の文化、106～111

遊里と芝居【歌舞伎】

文学【式亭三馬 十返舎一九 小林一茶 川柳・狂歌】

絵画【浮世絵】

洋学【解体新書 シーボルト】

陽明学【陽明学】

郷里に於ける封建社会の世相

研究問題、111

第五单元 近代の社会はどのようにして成立したか、112～131

一、封建制度の崩壊、112～118

下級武士の窮乏【下級武士の生活】

商業の発達と農民の窮乏【商業の発達 マニファクチャー 産業の発達 封建制度
のむじゆん 郷土における農民一揆】

学問のえいきよう

政治の改革【定信の改革 天保のききん 忠邦の改革 人返し 専売制度】

二、近代へのあゆみ、118～122

外国のようす【産業革命 イギリスの議会制度 アメリカの独立宣言 フランス大
革命】

人民の力

開港【高田藩の東条琴台 佐渡の地理学者新発田収蔵 開国 安政の大獄 幕府の
滅亡】

三、明治維新、122～125

新政府の方針【五ヶ条の御誓文】

封建制度の廃止【版籍奉還と廃藩置県 四民平等】

地租の改正

農民及士族の不平【士族の商法 自由民権運動】

四、文明開化、125～129

時代の流行【郷土における士族の転業】

不平士族の武力反抗

郷里に於ける新しい時代

米百俵

明治天皇の巡幸

日本郵便の父

県下最初の鉄道

社会のありさま

研究問題、129

年表、130～131

第六単元 近代の社会はどのように進展したか、132～154

一、自由民権運動、132～136

名ばかりの自由【藩閥政治】

自由の叫び【福沢諭吉 板垣退助】

国会開設の運動【政社 大隈重信 自由党 改進黨 景山英子】

憲法発布

議会の実際【自由民権に力を尽くした人々】

条約改正【治外法権 関税自主権】

郷土史高田事件（自由党の弾圧）

二、資本主義の発達と近代産業、136～140

日本の産業革命【富国強兵 財閥 官営工業 富岡製紙工場】

資本主義の発達

海外市場

日清戦争【天津条約 下関条約 租借】

北清事変【日英同盟】

日露戦争【ポーツマス条約】

日韓併合【韓国統督府^{イマ}】

資本主義の躍進

三、戦後の社会のようす、140～142

農村の生活【地租】

ふえる労働者

低い賃金

労働運動がたかまる

反戦運動【内村鑑三】

四、明治時代の文化、142～145

文芸【写実主義 ローマン主義 自然主義 新ローマン主義】

美術音楽【岡倉天心】

五、帝国主義のあらわれ、145～147

国際間の不安【帝国主義】

第一次世界大戦【ベルサイユ条約 国際連盟】

二十一カ条約【二十一カ条約 排日思想】

人民の生活【米騒動 関東大震災】

政党のふはいと軍閥の進出【政党内閣 世界恐慌】

六、大正、昭和の文化、148～150

学問【小学校の就学率は九九%】

宗教

文学【詩、短歌、俳句 児童の文学】

美術

映画、演劇【トーキー ラジオ】

七、太平洋戦争、150～154

侵略主義の開始【五・一五事件 二・二六事件 国際連盟脱退 ロンドン会議

満州事変 満州国】

軍国主義万能【日華事変】

日独伊三国防共協定【防共協定】

第二次世界大戦【三国同盟 日本の南方進出】

太平洋戦争【日米会談 原子爆弾 ドイツ降伏 日本降伏】

第七单元 平和への出発、155～162

【ポツダム宣言】

国民生活の現状【貿易再開】

軍国主義の追放【言論 思想 宗教の自由】

新憲法の公布【新憲法の特色 新警察制度】

国際連合と教育【国際連合 ユネスコ 新教育制度】

女性の立場と家【男女平等 選挙権】

経済力集中排除と組合運動【経済力集中排除 農地改革 財閥の解体 労働組合】

私達の進むべき道【湯川秀樹】

研究問題、161

年表、161～162

おわりに、(奥付)、163

資料3：大町中学校『郷土史を加味せる新しい中学の日本歴史』の「研究問題」（1950年版と1951年版）

凡例

- ・1950年版は上越市立高田図書館所蔵のものを、1951年版は宮城教育大学附属図書館所蔵のものを利用した。
- ・仮名書きの繰り返し記号は開いて記載した。
- ・下線は1950年版と1951年版とで異同のある箇所である。
- ・資料作成者の注を【 】で記載した。

第一单元（1950年版、18頁）

- 一、地球がどう変化し、動物や植物や、そして人類が、どのように生れ、どう発達してきたかを研究しよう。
- 二、人類がどのようにして火の使用や、言語の使用、農耕のしかた、道具の作り方などを考え出していつか具体的に研究してみよう。
- 三、原始社会の家族生活のようすについてしらべてみよう。
- 四、農業がはじまる前とあととで、社会はどのように変化したか、比較して表をつくってみよう。
- 五、私たちの近くの古代人の遺跡をしらべそして、それはどのような地理的条件にめぐまれた土地であつたのか研究してみよう。
- 六、邪馬台国の社会組織を史料によつて深く研究してみよう。

第一单元（1951年版、18頁）

- 一、私たちの近くの古代人の遺跡をしらべそして、それはどのような地理的条件にめぐまれた土地であつたのか研究してみよう。
- 二、農業がはじまる前とあととで、社会はどのように変化したか、比較して表をつくってみよう。
- 三、原始社会の生活を遺物、遺跡によつてしらべてみよう。
- 四、邪馬台国の社会生活を史料によつて深く研究してみよう。

第二单元（1950年版、61～62頁）

- 一、仏教について次のことをしらべてみよう。
 - ①釈迦の伝記をしらべてみる。
 - ②伝来^{ママ}の系路を地図に現わす。
 - ③世界の仏教分布図を作つてみる。
- 二、蘇我、物部両氏の行つた仏教崇拜可否の論争を脚本にして劇化してみよう。
- 三、十七条憲法にはどんなことが書いてあるかしらべてみよう。

四、飛鳥時代の建築の特徴を調べてみよう。

五、奈良時代に出来た^{ママ}重^{ママ}な書物をあげ簡単にその内容を解説してみよう。

六、奈良時代の人たちは旅をするときどんな苦勞をしたかを調べてみよう。

七、飛鳥、奈良、平安各時代の代表的な美術、工芸、建築の写真があつたら各人もちよつて展覧会をやつてそれぞれの時代の特徴について話合つてみよう。

八、平安時代の日記の中から当時の貴族の一日の生活を読んで日記を綴つてみよう。

九、平安時代の物語より当時の女性はどのような生活をしていたのかしらべて話合つてみよう。

十、平安時代のころなぜ女流作家が出たのかどんな作品があつたか調べてみよう。

十一、班田制は何故崩壊したのかその原因を調べてみよう。

十二、藤原氏はどのようにして政權をにぎつたのかしらべてみよう。

十三、保元の乱と平治の乱に活躍した人々の系図をしらべ表に現してみよう。

第二单元 (1951 年版、52～53 頁) 【「五」の「重な書物」を「主な書物」に修正した他は 1950 年版と同じ。】

第三单元 (1950 年版、88～89 頁)

一、中世封建社会のなかで、農民の生活がどのようなものであつたか、生産のしかたや社会のしくみの上から考えてみよう。

二、貴族や武士をはじめ、人々の考えはどのようにかわつていつたかをしらべてみよう。

三、東山文化はどのようにして生れ、また今日の生活にどのようにあらわれているかしらべてみよう。

四、承久の乱、元寇、南北朝の動乱、戦国のたたかひによつて世の中はどう変つたか。

五、世界の国々とどのように結ばれ、わが国はそれによつてどのようなえいきょうをうけたかしらべてみよう。

第三单元 (1951 年版、77 頁) 【1950 年版と同じ。】

第四单元 (1950 年版、123 頁)

一、江戸幕府がどのような政策で封建社会を確立させたかを学級で発表できるようにまとめてみよう。

二、刀狩や検地や慶安のふれ書によつて農村がどうかわつたかをしらべてみよう。

三、商工業の発達のようにすをしらべ、それが封建社会に有利であつたかどうかを考えよう。

四、鎖国をしたわけをもつとくわしくしらべ、キリスト教徒をどのように、だんあつしたかを学級に報告してみよう。

五、封建社会のもとでの文化にはどんな特色があるかをまとめてみよう。

第四单元（1951 年版、111 頁）【1950 年版と同じ。】

第五单元（1950 年版、140 頁）

一、封建社会のくずれたわけを、商工業、農業、学問、開国などの点からしらべてみて
討議会をひらいてみよう。

二、幕府の政治を改革しようとした主な人をあげてその政策を表にしてまとめてみよう。

三、維新の政治は封建時代とくらべてどのような点を改め、どのような点をそのままの
こしたかをしらべてみよう。

四、封建的なものの考え方や見方が今の生活にもどのようにのこっているかをあげて討
議してみよう。

五、アメリカの独立とフランス革命について参考書でしらべてみよう。

第五单元（1951 年版、129 頁）【1950 年版と同じ。】

第六单元（1950 年版、166 頁）

一、資本主義の発展につれて労働者や農民はどのような立場におかれたろうか

二、産業革命は如何にして行われたか。外国の産業革命とどこが違うか

三、明治の政治で民主的でなかった点を考えてみよう

四、自由民権運動に活動した人々とその主な功績をあげてみよう

五、資本主義の発展と侵略戦争はどのような関係があつたろうか

六、世界恐慌をきりぬける為にとつた政策をアメリカ、ドイツ、日本について比較して
みよう

七、古代国家に於ける天皇、近代国家に於ける天皇、終戦後今日に於ける天皇について
くらべてみよう

八、明治以来選挙権はどのようにひろがつてきたか

九、福沢諭吉、中江兆民、景山英子、新島襄達の仕事と現代のつらなりを考えてみよう

第七单元（1951 年版、161 頁）【1950 年版の第六单元を 1951 年版では第六单元と第七单元
に分けているが、「研究問題」と「年表」は第七单元の終わりに掲載している。「九」の
「現代のつらなり」を「現代のつながり」に修正した他は 1950 年版と同じ。】